

## 石巻 J M A T

新潟市医師会第4班

廣澤 利 幸

3月22日、宮城県の女川から津波に被災された70代の姉妹が受診されました。新潟市内の親戚宅に越してこられたそうです。地震の当日は外に避難していたそうですが、津波が来るから高い所に上るようと道路向かいの銀行の職員の方に声をかけられ、すぐ近くのビルの3階まで上がったそうです。間もなくその窓から流されてきた自分の車が見え、驚く間もなく流れ込んできた濁流に追われさらに上にと階段を上ったそうです。さっきまで向かいの銀行の屋上には自分に声を掛けてくれた人が見えたけど、波が来たあとは誰もいなくなった、自分はこうして生きているのにと話されていました。

自分にできることは何かないだろうか。地震が発生してから連日の報道の中で、だれもが等しくそう考えたことと思います。現地の検視医の応募も、すでに御遺体の状況が厳しいため参加できませんでした。

当初 J M A T の応募要項では自分でチームを結成する必要がありましたが、その後は市医師会でチームを編成していただけることになり、すぐに看護師と申し込みました。「うちはそれほど混んでもいないし」と、「それじゃあ休診です」と、「え?」と目を丸くする職員を残して4月28日から石巻へ出かけて行くことができました。

4月28日 5:45 県庁正面玄関集合です。県立がんセンターの石田先生、看護師永井さんと薬剤師田中さんのチームと、市医師会チームの2チームです。市医師会チームは医師会の鎌田局長と眞保さん、西区の調剤薬局から参加してくれた薬剤師の秋山さん、うちの看護師さんと僕の5人でした。そこで県医務薬事課の新井さんが加わって総勢9人がバスで磐越道から東北自動車道、三陸道を石巻に向かいました。

9時過ぎには仙台市内に入りましたが、その後松島から先が渋滞でした。石巻に向かう車線は山

側なので、被害の様子はうかがえませんでした。帰りに走った車線は海側に面していたので、そこからは高速道路のすぐそばまで津波で流された車や材木などが散見されました。

11:30 石巻日赤病院に到着。同行していただいた新井さんは私たちの無事の到着を見届けてそのまま新潟に戻られました。ご苦労さまでした。日赤病院でのオリエンテーションの後、石田先生たちのチームと別れて避難所の一つの石巻女子高に向かいました。その被災者数は58人でした。血圧と血糖測定と風邪、不眠などの患者さんの診察の合間に避難所内をまわり血圧測定をしながら話を聞いて回りました。同じ頃石田先生に向かった門脇中学では避難者数が約500人と多くて苦労されていたようでした。

18時に石巻日赤病院でのミーティングに参加。

地震が起きた直後からすぐに石巻日赤を中心とした救護班が結成され、石巻地区を巡回していました。まもなく全国から支援が入り、全国の日赤病院、各県や医師会、大学他からの支援医療チームを統括して、石巻圏合同救護チームが作られました。現在も指揮系統を石巻日赤に集中して、石巻圏内を避難所の所在によって11のブロックに分けて支援活動を続けています。各避難所の避難者



の数、受診者数、呼吸器症状、消化器症状、有熱者、インフルエンザの発症者数などが毎日報告され、Google のサイトで逐次更新されたエリアごとの状況を誰でも閲覧できるようになっていました。

毎日入れ替わる雑多な医療チームの組織化は大変な苦勞だと思いますが、雑然としていても機能的に運営されていました。この日のミーティングでは感染症動向と支援の状況などの報告があり、新潟県チームが兵庫県チームとともに担当しているエリア4で呼吸器感染症が流行しているなどの報告がありました。

診察が長引いた石田先生チームが夕方遅くに戻られて、お互いの報告を行ってから日赤病院を出た時は20時を回っていました。石田先生たちは比較的隣の新潟エリアと名付けられた狭い一角で雑魚寝の宿泊だったそうです。僕たちは近くに宿泊先を見つけられず車で松島までもどりました。渋滞で2時間かかりましたが、入浴できたのはとてもありがたかったです。食事を済ませて早々に休みました。

翌日は快晴。朝日がまぶしくて5時には目が覚めました。8時半に石巻中学校で兵庫県チームと打ち合わせがあるので、朝食を済ませて6時半に宿舎を出ました。

渋滞を抜けて8時過ぎには石巻に着いたので、前日に診療した石巻女子高に寄りました。そこは住宅の密集した高台にあって、高校前の坂をおりると海が見えるとのことで少し歩きました。下り坂の狭い路地を抜けるとまもなく広く視界が開けてきました。そこから石巻の海岸地帯が一望にできました。そこから見える光景は別の世界でした。そこは子供のころ見た戦後の焼け野原の写真のようでした。遠くに市立病院がぼつんと見え、すぐ手前に火災にあった門脇小学校が立っていました。視界の先遠くには広く穏やかな太平洋が見えました。あの日の惨劇が信じられないような暖かく穏やかな春の朝でした。高校に続くこの細く急な坂道を駆けあがれた人だけが助かったのかと思うと足元が揺らぐような気がしました。

8時半にエリア4の拠点になっている石巻中学校で、この地区担当幹事の兵庫県チームと打ち合わせを行いました。このエリアでどこの誰がどんなふうでどうするといった細かい情報、眼科はど



こに連絡すればいいか、歯科はどこかといった情報と前日の日赤のミーティングでの報告を交換しました。

2日目は石田先生と交代して門脇中学校で診察しました。患者さんの多くは咽頭痛と咳が主訴で、みな血圧が高かったです。少し時間に余裕があって、避難所の中を歩いて回りました。被災された方は体育館と武道場、教室の3か所に分かれて生活されていました。咳の患者さんは特に武道場に多く、そこは窓が小さく換気が悪くてあちこちで咳の音が聞かれました。隣の家族との間には遮るものがありません。風邪は3回目ですという訴えも聞かれました。避難場所を歩いて足腰が不自由で歩けない方の血圧を測って回りましたが、やはり血圧の高い方が多いようでした。

門脇中学校の診察室は体育館隅の男子トイレの中の更衣室を片付けて間借りしていました。以前は保健室で診察していたそうですが、5月には学校が始まるため移動し、避難所全体が縮小されつつありました。決して学校が避難所に適しているわけではありませんが、縮小された後にこの人たちはここを出てどこに行けばいいのだろうと考えてしまいました。

夕方には日赤病院で石田先生たちとも合流できました。石田先生のチームは住吉小学校と女子高での診療の合間にグループホームも回るようになって忙しい様子でした。

この日のミーティングでは市内の調剤薬局が復旧して、保険情報なしでも院外処方箋が受けられるようになったという報告があり、このころには支援から徐々に自立へとシフトしているようでした。

3日目も5時起床。お天気が良くていいのですが、朝日が眩しくて寝ていられませんでした。6時半に出発。朝のミーティングの前に、車で津波のあった海岸地帯に下りてみました。すでにあたり一帯の探索が進んでいて、山積みになったがれきに「搜索済」の張り紙が1枚ずつはられていました。ここにはもう誰もいません。がれきが除かれ開けた道路を挟んでそんな小さな山がずっと並んでいました。

少し歩くと高台に続く道があって、ひと吹き風の満開のさくらの花が雪のように舞っていました。こんなに晴れて、こんなに静かで息をのむような美しいひと時なのに、ここで起きたことが信じられませんでした。

朝のミーティングのあと門脇中学へ。昨日とかわらず咳の患者さんが続きました。この日は仮設住宅にあたったと、いくつかの家族が引っ越しをしていました。現状では衣食住などの基本的な生理的欲求すらまだ十分ではありませんでした。お弁当が配られる時はいいのですが、まだおにぎりが一人1個とパン1個、家族分で何個と配られていた食事もありました。

僕たちはここで避難者たちの健康を守ろうとしています。でも僕たちがいくらそう思っている、住まいや食生活など衛生面ですら改善されなければとても難しい。僕たちがここにいることです。こしでも孤立感が和らぎ、復興と将来への希望につながってくれればと願います。

この日お昼には糸魚川チームに引き継ぎを済ませて午後には帰路に着きました。

新潟着19時。途中の仙台市内のパーキングで、これも支援のうちだからとたくさん「萩の月」と

笹かまぼこを買いました。機会があればまた行きたい、復興が進んだ時にも訪れたいと思います。その時はとてもきれいな街だろうと思います。

石巻日赤がコーディネートした医療体制は、多くの医療チームをまとめ上げてとても機能的に運営されていました。そのためには毎日たくさんの報告書の提出があるのですが、同行してくれた市医師会の鎌田局長と眞保さんがとてもよく働いてくれて、おかげで診察に専念できました。眞保さんはどんな道でもまるでそこに住んでいる人のように狭い道でも自在に車を操ります。薬剤師で参加していただいた秋山さんは会津の避難所で働いて、石巻は今回が2回目でした。僕が欲しいという薬をすぐに日赤病院の倉庫から用意してくれて、残薬の整理や患者さんの説明もとても丁寧で助かりました。支えてくれたチームのみなさんに感謝します。

ここでこうして報告書を書いていたら、女川から越してこられた姉妹が来週には宮城に帰りますとご挨拶に来られました。女川は石巻の隣でもっと壊滅的な被害を受けていました。女川の避難所では食事がまだ1日2回とも聞きました。

「帰られて生活のめどはあるのですか。」

「自分たちの家は流されてもう住めないの、石巻にアパートを借りることにしました。ここには向うの様子が分かりませんからともかく帰ります。そのあとのことは引っ越してから考えます。自分たちの住処はあそこにしかありません。」

新潟も住みよい街だと思いますが、そのお返事にはお答えする言葉がありませんでした。お大事にして下さい。今は自分の居場所に帰るお二人にただ幸多かれと祈るばかりです。